

4 3 【レヴィ家の饗宴】と【聖マタイの召命】

【画面上下分断線】の持つ深い意味

真鍋友範

2023

はじめに

未だに疑問である点の一つは、画家カラヴァッジョが、ローマ移住前、ミラノでの修業時代に、ヴェネチアを訪れて、ヴェネチア派の先輩画家たちの作品を研究したのだろうか、という点だろう。

手元に資料はないが、いくつかの現存作品を通して、事実について仮説を提示したい。

まず、3点の表現例あげたい。

1 レヴィ家の饗宴



パオロ・ヴェロネーゼのこの作品は、当時スキャンダラスな巨大な油彩画として有名だ。ヴェネチアのアカデミア美術館で実際にこの作品の前に立った経験のある方なら、肯ける巨大な作品だろう。

作品の構成要素で最も注目するのは、ヴェネチア派の伝統要素の一つにある

背景部分、特に【建築群を際立たせた描写スタイル】だろう。

人物や群像劇が病者の主体である場面であるにもかかわらず、あえて人物群は画面の底面に描かれている。

これは、パオロ・ヴェロネーゼよりも先輩の画家、例えばカルパッチョの《聖ウルスラ連作》における聖ウルスラの殉教場面にも使われた特徴的な構図手法ではあった。

2 聖ウルスラ連作 《聖ウルスラの殉教》



フィレンツェ派のラファエロもまた《アテナイの学堂》の中にも同じ手法が使われている。

3 アテナイの学堂



これら3例からも明らかであるが、この【画面上部を、建築空間の表現に充てる】という構図技法は、当時のルネサンス絵画界においては、ごく普通にヴェネチア派、フィレンツェの画家たちによって取り入れられた表現であったことは明らかだ。

さて、カラヴァッジョの《聖マタイの召命》は、どうであったのか。



これで判ることは、カラヴァッジョは、師ペテルツァーノを通してヴェネツィア派由来の【上下分割空間の扱いの表現様式】を踏襲していたことになる。

もう一度この4例を見ると、気づかされる点がある。

それは、カルパッチョの《レヴィ家の饗宴》と、ラファエロの《アテネの学堂》では、【上下分割空間の扱いの表現様式】において、共通性がある。

それらが、【建築空間そのものを強調している】のに対し、カルパッチョの《聖ウルスラの殉教》とカラヴァッジョ《聖マタイの召命》には、それら建物の荘厳さの強調とは異なる【画家の強調表現意図】が隠されている。

では、先にカルパッチョの《聖ウルスラの殉教》からもう一度見よう。



* 画面上下分断線の存在と、その表現効果に注目したい。

【画面上下分断線】の上側で、目立つのは、フン族の勝利を象徴する旗と、聖ウルスラの遺体だ。

つまり、画面の上側では、目立たせようとした要素が、より強調されるように配置されている。

因みに、エンタシス状の円柱は、画面左右での時間差、つまり画面展開を示唆する要素となっている。

このように、【画面上下分断線】の上側には、画家カルパッチョの意図した重要な構成要素が。配置されているのだ。

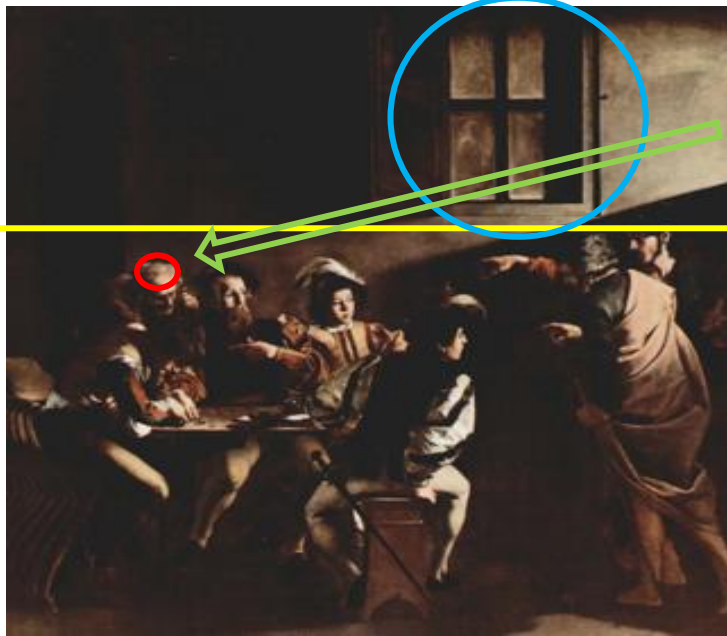
では、カラヴァッジョ《聖マタイの召命》は、どうだろう。

カラヴァッジョの描いたのは、みすぼらしい簡素な税務の部屋の窓と、直接描かれてはいない右側の高窓から差し込む光だ。

この【高窓からの光には特別な意味がある】。

これは、【イエスが迷うことなくマタイを選び出すために、天空の父なる神からの啓示の光を導き入れる窓であった】のだ。

【無駄なものは、一切描かず、必要なものは、しっかり正確に描くというカラヴァッジョの描画姿勢が明確に現れている作品】のひとつだ。



- * 高窓の光は、天空の父なる神からの導きの啓示となっている。
- * イエスが迷うことなく、マタイを特定できた理由は、この点光があった為と分らせてくれる。

【この窓には特別な意味がある。】窓格子でありなが、縦格子の上部は陰影で短くなり、これは【イエスを象徴する十字架】になっている。

呼応している部分が、【中腰で部下の収税人を覗き込む、上司らしき収税人の額上に描かれた点光だ。】

繰り返すが、これは単なる外部から高窓を通る偶然の光ではない。これは意図して描かれた【神からの啓示の光】だ。

拡大したのが、この写真部分だ。

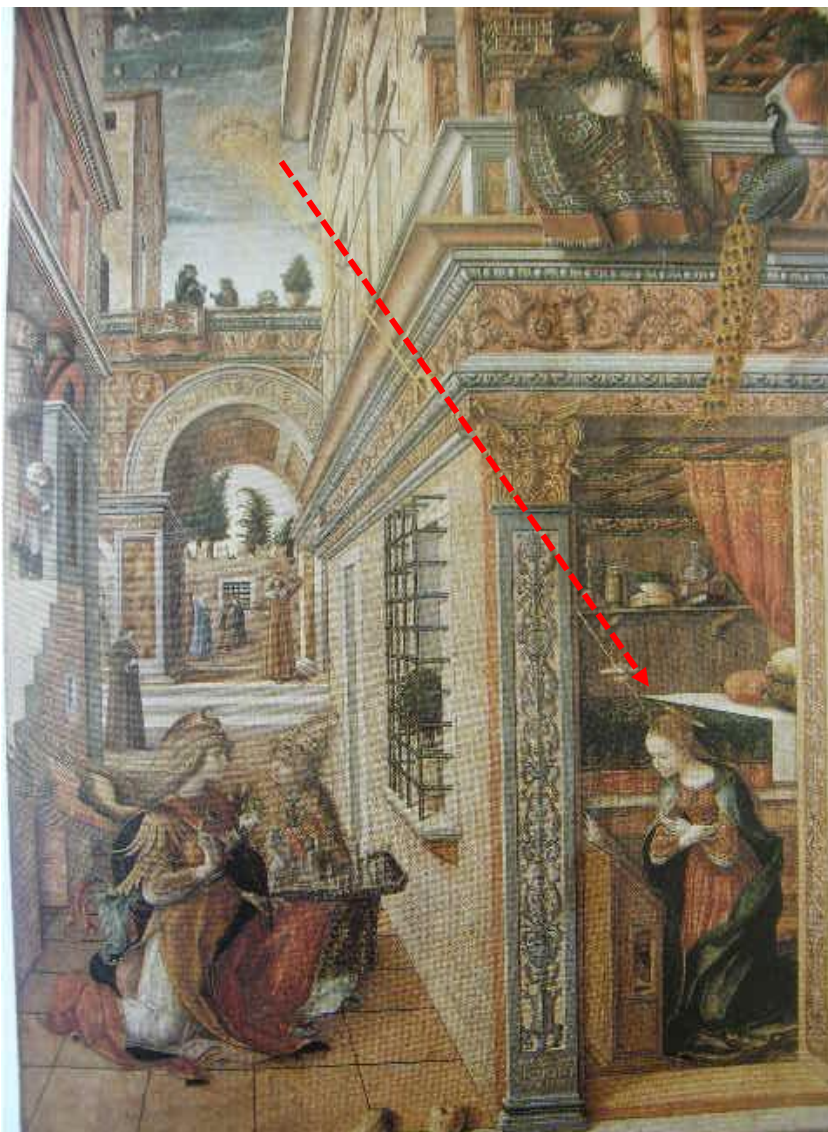


* イエローの円内に注目

お気づきのように、天窓からの光は拡散するので、このように点光となって頭部に垂ること決して無い筈だ。明らかに不自然な光なのだ。つまり、この点光

は、父なる神からの光の表現であることは疑いようが無い。

では、この主張の根拠となる作例を皆さんに紹介しよう。



《受胎告知》 カルロ・クリヴェッリ テンペラ 207×146
ナショナル・ギャラリー ロンドン 1486

*この例では、受胎告知に現れた大天使とは別に、建物の上空の【父なる神からの光線】が、マリアの額に光線として注がれている場面として描かれている。

カラヴァッジョは、当時の絵画表現を応用して、《聖マタイの召命》の中の呼び出されている、中腰姿で机に寄りかかっている（注：立っていない）収税人マタイに注がれる【父なる神の光】を写実的に描きこんだのだ。

不要な要素は描かないが、必要な要素はしっかり描くカラヴァッジョの才能が溢れている。

この場面を、『場末の酒場のような』と注釈する過去の美術史家は、この事実を完全に見逃していることになるだろう。

【カラヴァッジョは、この場面が場末の酒場などではなく、神の空間であることを、しっかり描きこんでいるのだ。】

【画面上下分断線】の存在で浮かび上がる衝撃の事実には、我々は今一度注目すべきだろう。